

令和 7 年度(2025 年度)第 2 回 八王子市社会福祉審議会 地域福祉専門分科会 議事録		
日時・会場		令和 7 年(2025 年) 7 月 28 日(月)14:00~16:00 八王子市役所 議会棟第六委員会室
出席者	委 員	黒岩 亮子 (日本女子大学) 島崎 誠 (八王子市民生委員児童委員協議会) 石井 修一 (八王子市町会自治会連合会) 齋藤 健 (八王子市民活動協議会) 下島 宏文 (市民委員) 西田 佳子 (八王子市社会福祉協議会) 丸山 颯姫 (市民委員) 室田 信一 (東京都立大学) 山下 晋矢 (八王子市医師会)
	市職員	菅野 匡彦 (福祉部長) 小池 明子 (福祉部 生活福祉担当部長) 元木 博 (福祉政策課長) 白石 利和 (高齢者いきいき課長) 櫻田 ひかり(障害者福祉課長) 小俣 英一 (生活自立支援課長) 中山 あずさ(健康医療政策課長) 志村 慶太 (健康づくり推進課長) 原 清 (子どものしあわせ課長) 波塚 美千代(保険対策課主査)
欠席委員		上村 晃一 (市民委員)
次 第		1 開会 2 報告 (1)八王子市の「にも包括」の取り組みについて (2)AI 傾聴窓口「はちココ」の実証実験について 3 議題 包括的な支援体制の構築に向けたはちまるサポートの役割と“つながり”について 4 その他 5 閉会
公開・非公開の別		公開
傍聴人の数		なし
資料		・次第 ・第 4 期八王子市社会福祉審議会地域福祉専門分科会委員名簿(R7.4.1 時点) ・【資料 A】 八王子市の「にも包括」の取り組みについて ・【資料 1】 AI 傾聴窓口「はちココ」の実証実験について ・【資料 1 参考】 はちココ実証実験結果レポート ・【資料 2】 包括的な支援体制の構築に向けたはちまるサポートの役割と“つながり”について ・【当日配布】 孤独・孤立対策ワークショップフライヤー

会議の要旨	
	<p><b>【1 開会】</b>  &lt;黒岩会長より挨拶&gt;</p> <p><b>【2 報告】</b>  (1) 八王子市の「にも包括」の取り組みについて  &lt;【資料 A】に沿って保健対策課 波塚主査から説明&gt;</p> <p><b>質疑応答</b></p> <p>黒岩会長      【資料 A】スライド 15 で「通院していても、障害福祉サービスがつながっていない方が多い。」とあるが八王子市は精神病院がたくさんある中で、  ①現在 PSW を派遣している病院はどのような病院か。  ②医療機関に対して今後、地域とどのようにつながっていくのか、またつながっていない医療機関と今後どのようにつながっていくのか、課題も含めご教示いただきたい。</p> <p>波塚主査      ①現在は、高槻病院、駒木野病院、平川病院が手を上げてもらっている。  ②新規医療機関とのつながりは保健所でも苦慮しており、課題と捉えている。  医療機関向けの説明会をしたが、母体が精神科病院でない病院は説明会に参加していただけない。</p> <p>黒岩会長      既にクリニックに通っているが改善しない方には、にも包括は良い制度と思われる。</p> <p>山下委員      約 5 年前から病院でも、国等に訴え包括的な体制ということで、身体障害者に対するサービスも少し進んできているが、精神疾患の領域は進んでいない。精神疾患の方はてんかんや糖尿病の合併症がある方も多く、精神病院にいられなくなるケースも非常に多い。また、医療方針が他の医療とは異なり、連携がとりづらいうという特徴もある。てんかん等の合併症の対応ができる医療機関が積極的に関わる必要があると考える。</p> <p>波塚主査      身体合併は課題と捉えており、セルフネグレクトの傾向もある。地域の医療機関にそういった症状の説明ができると良くなると思う。</p> <p>菅野部長      にも包括の評価会議があり、そこでクリニックとの連携が課題にあがっていた。現在、協力いただいている病院は地域とのつながりが深い病院であるが、地域によって病院の数が少ない地域がある。そういった地域は「地域地縁があるところ」という傾向がある。</p> <p>黒岩会長      地域共生社会を考えたとき、精神疾患が原因で入院してしまい、その後退院して地域に出てきた方は、地域で差別されてしまうことがある。クリニックにつながれる人が多いと良い。</p> <p>(2) AI 傾聴窓口「はちココ」の実証実験について  &lt;【資料 1】【資料 1 参考】に沿って福祉政策課 辻野主査から説明&gt;</p>

室田委員	<p><b>質疑応答</b></p> <p>寄り添ってくれて、窓口に行くことができない方に対しては有効であると感じた。また、最初の入り口としては良いと思う。</p>
島崎委員	<p>誰かに聞かれることがないのが良い。自殺者の多い 40 代から 50 代の方に少しでもつながる人がいると良いと思う。</p>
黒岩会長	<p>はちまるサポートは専門性を持つ機関ではないため、職員への負担が懸念である。また、はちまるサポートへ行っても解決できないという不信感につながる可能性も考えられる。そのため、八王子市の情報をより学ばせ、適切な窓口へのコーディネートが大切である。はちココは、自己アセスメントにもなると考える。</p>
山下委員	<p>医療分野でも DX に力を入れているが、お悩み相談ロボットとして申請すると医療の面でも通しやすいのではないかと。</p> <p><b>【3 議題】</b></p> <p>包括的な支援体制の構築に向けたはちまるサポートの役割と“つながり”について  &lt;【資料2】に沿って福祉政策課 辻野主査から説明&gt;</p> <p>包括的な支援体制の実現を目指してはちまるサポートの機能をどう充実するか。  論点①地域の課題や問題と“早期に”つながるためにはそのような仕組みが必要か  論点②地域住民や医療・介護、民間、大学等の多様な主体と有機的に連携するには、現在の多機関協働事業や市組織の在り方も含め、どのような仕組みが必要か。</p>
石井委員	<p><b>質疑応答</b></p> <p>論点①について、福祉部でこれだけのことをやるのは良いことだが、他部署との連携が重要ではないか。市民活動推進部では、町会・自治会と協力して実施している。市民センターなどを活用し、はちまるサポートの周知や職員の意識向上に努めてほしい。</p>
島崎委員	<p>民生委員としての立場としては、町会・自治会と連携して業務を行っているが、個人情報の取扱いについては守秘義務があり、課題もあると感じている。</p>
室田委員	<p>論点①について、支える側から提起された論点となっているため、支えられる側を主語に検討し、つながりたいと思わせるにはどうすべきかが重要ではないか。音信不通になる学生がいると SNS などで生存確認をしている人もいる。主語が弱い立場にいる学生や手助けが必要な地域の高齢者などがどのようにつながるのかを考えた方がよいのではないかと。ミクロなピアネットワークを作ると、早期発見の基盤になると思う。</p> <p>また、自由な世の中であるからこそ、半強制的なやり方が生きてくると思う。支援したい人ではなく、支援されたい人に半強制的に入ってもらうことで、支援する側だけではなく、支援される当事者も増える。</p>
黒岩会長	<p>ただ、講習会等や活動をするのではなく、はちまるサポーターのあり方は考えた方が良いと思う。</p>

山下委員	<p>利用者の立場を考えることが必要である。これからの人口減少社会では、AIは必須であり、仕組みだけでも作っておかないと太刀打ちできないと思う。</p> <p>災害時の対策の話が上がったが、パーソナルヘルスカード（生まれてから死ぬまでの情報が入っているもの。）を個人に持たせることで、本人の情報がわかるなどの仕組みがあると良いのではないかと。生存確認の点では、スマートフォンのアプリで半強制的に管理するなどの手法がある。地域力、市民力がないと地域共生社会は成り立たない。サポーターが増えない、少ないなどといった課題がある。発想の転換をし、はちまるサポーターをすると住民税を2%減税するなどの対策を行う必要があるのではないかと。はちまるサポート課を作るなど多機関連携として、横串を刺す役割を持つ地域共生社会に向けた組織を作る必要があると思う。</p>
下島委員	<p>論点②について、大学との連携はどのような想定をしているのか。人手不足として必要なのか、研究として必要なのか。</p>
元木課長	<p>学術的な部分だけではなく、大学生の人手的な部分でも期待する。</p>
下島委員	<p>循環を意識した連携がないと、サステナブルな仕組みにならない。市民・民間企業との接点をつなげる仕組みを、デジタルやAIを利用して取り入れることが出来ないか。論点①の視点になるが、人と人では、忖度や限界があるため、今まではちまるサポーターなど人でつないできた部分をAIなどで判断し、情報の集約とさばきをAI等の仕組みにより実現できると現場の労力が削減できるのではないかと。</p>
齋藤委員	<p>各NPO法人がはちまるサポートや行政機関にどのようにつながっていくかが課題である。福祉分野では、特にそう捉えている人が多いのではないかと。</p>
元木課長	<p>はちまるサポートや地域との意見交換会ができると良いか。</p>
齋藤委員	<p>数が多いため、全NPO法人と行うことは難しいと思うが、そういった機会も重要であると考えている。</p>
西田委員	<p>論点①の「早期につながるための仕組み」は、はちまるサポートの認知度が低い点も課題の一つとして考えられる。セミナー等を行っているが、参加者は200名程度である。地道な普及啓発活動は非常に大切であるが、日々の相談では簡単な1ターンで終了する相談も意外と多く、はちココやAIを活用する方法も重要ではないかと。</p>
丸山委員	<p>理系の大学に通う中で、はちまるサポート等の相談機関を知る機会ほとんどない。</p>
室田委員	<p>自分が行う講義では、福祉を取り扱っているのではちまるサポートの認知度は比較的高いのではないかとと思うが、それでも、悩んでいる学生がはちまるサポートへ相談に行くかどうかは疑問である、</p>
黒岩会長	<p>興味のある学生で、地域参加に意欲があり、予防的な取組みに参加したい方は多いと思われる。</p>

丸山委員	役に立ちたいと考えている学生が取り組みやイベントの存在を知っていれば、参加する学生は多くいると思う。はちまるサポートやはちココの存在を知る機会がそもそもない。
西田委員	現在は SNS（Instagram、Facebook や公式 LINE）や社協のホームページ、八王子市・社協の広報誌を中心に普及啓発活動をしている。
元木課長	興味のある方に対し、どのように周知していくかが重要である。
下島委員	<p><b>【4 その他】</b></p> <p><b>&lt;下島 宏文（市民委員）から&gt;</b></p> <p>高齢者向けの賃貸住宅、要介護１・２の方を主に対象とする住まいの提供を行う。約１１万で１か月を過ごすことが出来る。内覧会を実施するので、ご興味があれば申し込みたい。</p>
議事録署名人	黒岩 亮子